

タイの互助慣行

—日本との民俗社会学的比較—

恩田 守雄

1. 序

本論文の目的は2017年8月にタイ東北部コンケン近郊の農村、北部チェンマイ近郊の山村、2018年3月に北部チェンライ県メーサイ郡のアカ族山村、チェンセーン郡の農村、少数民族（タイ〈ルー〉族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ〈シャン〉族）共生の山村で行った聞き取り（半構造化インタビュー）調査から、相互扶助に関わる社会慣行を明らかにすることである（表1：「現地調査箇所」参照）⁽¹⁾。始めに日本の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどで主に労働力を交換する互酬的行為のユイ、共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理などでヒト（労力）やモノ（物品）、カネ（金銭）を集約

表1：現地調査箇所

調査年月		市町村
2017年 8月	東 北 部	・ Moo7 (Ban Nong-Or Noi), Tambon Kudnamsai, Amphoe Namphong, Khon Kaen Province (8)
	北 部	・ Moo2 (Ban Om Long), Tambon Mae sab, Amphoe Samoeng, Chang Mai Province (6)
2018年 3月	北 部	・ Moo25 (Ban Maejantai), Tambon Takoh, Amphoe Maesuai, Chiang Rai Province (3) ・ Moo3 (Ban Tha kan thong), Tambon Ban Saeo, Amphoe Chiang Saen, Chiang Rai Province ・ Moo11 (Ban Mae Aeb), Tambon Ban Saeo, Amphoe Chiang Saen, Chiang Rai Province (6)
	大 学	・ 239 Huay Kaew Road, Muang District, Chaing Mai Chaing Mai University

() は同一箇所での聞き取り人数

しその成果を分かち合う再分配的行為のモヤイ、冠婚葬祭で相手から見返りを期待しない支援（援助）的行為のテツダイについて（Onda, 2013; 恩田, 2006）、それぞれ該当するタイの互助行為を取り上げる。人口が6,572万人（2015年国勢調査）のタイは仏教徒が94%を占める。フィリピンやインドネシアのような島嶼国家ではないが、国土が51万4,000m²（日本の約1.4倍）あり、互助慣行に関する統一的な語彙を求めることが困難な点は他の東南アジア諸国と共通する。次に調査対象地東北部と北部を中心に伝統的な互助慣行について日本との共通点と相違点を明らかにする。特に北部では少数民族（単一民族村、複合民族村）の互助行為にも注目する。最後にタイ固有の仏教と国民性から互助社会を展望する。その際「開発僧」の農村開発を取り上げ、人間開発と互助行為の関係にもふれる。両国の互助慣行の比較を通して、本稿が改めて人と人とのつながりや絆について考える契機になることを期待したい（*）。

2. タイの代表的な互助行為

(1) 互酬的行為

①東北部

コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の50代女性の農民によれば、米の収穫は賃金を払ってする（2017年8月聞き取り）⁽²⁾。ただし最初苗がばらばらなので、それを並び替えるとき近所の人に助けてもらう。この田植えでローンケーキ（他者〈ケーキ〉の力を得る〈ローン〉の意味）をし5軒で2週間かける（表2：「タイの互助慣行」参照）⁽³⁾。この集団は日本のユイ組にあたる。ここは地域内でローンケーキをする唯一の農家（グループ）である。別の50代女性の農民でクムノイ（ノイ組、ノイは小さい意味）の代表者の話では、機械化される前は雑草を根ごと引き抜く根こぎで苗をそろえるとき手助けしをした⁽⁴⁾。機械化されてからローンケーキの言葉は使わなくなった。この等間隔に植えていく機械植えで、賃労働は一人4000バーツ（1バーツ≒3.39円、2018年9月7日現在）から5000バーツ払う。50代男性でBan（行政村）の代表者（村長）によると、10年ほど前までは田植えや稲刈りのときローンケーキをしたが現在機械化され行っていない⁽⁵⁾。家をつくるとき壊すときも手助けしたが、ローンケーキという言葉は使わない。50代男性の農民の話では、2007年くらいまであったローンケーキは今はない⁽⁶⁾。所有する機械を使い近所の人を雇い稲刈りをするが、一人320バーツ出して12人で1日で済ます。田の所有者は稲刈りをしない。田植えも同様に人を雇う。60代の男性農民でクムヤイ（ヤイ組の南地区、ヤイは大きい意味）の代表者によれば、かつて田植えや稲刈りでローンケーキをしたが今はしていない。田植えでは人を雇わないが、稲刈りでは2、3人雇い4日間で済ます⁽⁷⁾。この伝統的なローンケーキという互助慣行を忘れないように、クドナムサイの行政区レベルで議員や農協の委員、村民に対し

表2：タイの互助慣行

互助行為		日 本	タ イ
一般的な言葉		相互扶助	・ ガーンシューイルアー（手助け） ・ ガーンシューイルアスンガンレガン（スンガンレガンは共有の意味）
互酬的行為		ユイ	・ ローンケーク（他者の力を得る，集約する） ・ トブケーク（トブはお返しの意味）〈北部〉 ・ アオムートブム（アオムーは手助け，取る，トブムーは返礼，返すの意味）〈北部〉 ・ ガナガ（ガは力，ナガは取るの意味）〈アカ族の言葉〉
再分配的為	共同作業	モヤイ	村仕事 ・ パッタナムバーン（バーン〈村〉の仕事） ・ ガーンスワンルアム（スワンルアム〈共有〉の仕事） ・ ガーンタムンガーンルアムガン（タムンガーンは働く，ルアムガンは共同，協力の意味）
	小口金融		頼母子無尽 ・ シェア（share），レンシェア〈シェア〉（シェアは多義語で，遊びの意味をもつlenをつけてlen shareと言うと，小口金融の意味が明確になる。なお語源はシャーで，中国からの外来語「社」である）
支援（援助）的行為		テツダイ	葬儀 ・ シュアイ（help） 婚儀 ・ シュアイ

て文書で促している⁽⁸⁾。1980年代の前半に行われた中部タイの農村調査ではこうした労力交換の記録が残り（貸借関係の消滅とともに記録も破棄される），まだ慣行として行われていたことがわかる（北原，1987，351-358頁；494-500頁；北原，1990，143-144頁）。もっともこの労力交換はアオレーンという言葉で示されている⁽⁹⁾。この相互扶助のネットワークは集落を単位とした親戚関係が中心だが，村民も含めた地縁関係からされてきた。このような労力交換が機械化とともに賃労働に変化する。土地面積が大きくなるにつれ，日雇労働力への依存が大きい。

②北部

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の30代女性の農民によると，ローンケークをする人もいれば，賃金を払って雇う人もいる（2017年8月聞き取り）⁽¹⁰⁾。70代女性の話では，10年から20年くらい前までは田植えや稲刈りのときローンケークをしたが今はない。このローンケークは助けると助けられる関係で，トブケーク（トブはお返しの意味）のほうが行為の内容から言って言葉としてふさわしいと言う。「ローンケークしてほしい」と言うとき村の中のどこかの家が手助けしてくれた。その人に直接お返しをするのではなく，村全体でお互いに手助けした。土地が大きくないため手作業で

するが、畑作では機械を使っている。60代男性と50代女性の農民夫婦によれば、ローンケーキは田植えやニンニクの種植えで今も行っている⁽¹¹⁾。労力提供のお返しはその受けた相手でなく同じ地域の人であればよいと考えている。こうした労力交換をトブケーキとも言っている。この他アオムーまたはアオワン（アオは取るの意味）という「日をとる」という意味の言葉で労力提供をお願いし、トブムーまたはトブワン（トブは返すの意味）という「日を返す」という意味をもつ言葉でお返しをする。50代男性の村長（元僧侶）の話では、ローンケーキがよくない意味で使われているが、村ではあくまでも伝統的な行為として理解している⁽¹²⁾。ニンニクは10人くらいのグループで政府の農業協同組合銀行（BAAC: Bank for Agriculture and Agricultural Cooperatives）からお金をもらい改良を行い業者に売るが、僧侶が指導しているグループもある。この地域では米は販売用ではなく多くは自給用である。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族30代男性の代表によれば、コーヒー豆の収穫が少ないときには時間があるのでローンケーキをしていた（2018年3月聞き取り）⁽¹³⁾。多忙なときよりも逆に余力があるときに労働力を提供してきた。アカ族の言葉ではこの労力交換をガナガ（ganga）と言う（「ガ」は力、「ナガ」は取るの意味）。このローンケーキは共有地（コモンズ）でする場合と個人の土地でする場合の二通りあった。今は個人の土地となり自分のコーヒー豆の収穫で手一杯でローンケーキはしていない。コーヒー豆のブームのときは多く収穫するため他の集落から来て手助けをしてもらった。なおこの地区では以前ケシの栽培をしていたが、アヘンの代替作物への転作を政府から奨励され22、3年前にはやめてコーヒーを栽培している⁽¹⁴⁾。それでもケシは7年前まで栽培していた。ケシの栽培では個人の土地所有になってもローンケーキをしていた。この栽培はもともと共有地で行ったもので、これは私有地以前の時代の残滓と言えるだろう⁽¹⁵⁾。60代の男性の話では、米は一世帯では食べきれないほどできたので他の世帯にも分けたが、代わりに別の機会に豚をもらったりした⁽¹⁶⁾。この種の行為をアカ族の言葉ではユーパー（交換の意味）と言うが、ローンケーキは田植えや稲刈りのときの言葉で区別していた。しかしその一方で現在コーヒーや梅、お茶をつくっている40代女性の農民によると、自分の畑だけで収穫していたのでローンケーキはなかった⁽¹⁷⁾。

チェンライ県チェンセン郡バーンセーオ行政区ターカートーン村の60代女性の農民によれば、ローンケーキはイーサーン（東北部）にいるとき40年から50年ほど前にあったが今はない（2018年3月聞き取り）⁽¹⁸⁾。機械をもっていないので借りて賃金を払い人を雇っている。家をつくるとき壊すときも手助けしたが、このローンケーキという言葉は使わなかった。同区メアエーブ村の40代女性（ルア族）農民の話では、米やトウモロコシ、イモの収穫でお互い労働力を交換するローンケーキを行っている⁽¹⁹⁾。70代女性と40代女性の農民（ともにタイ〈ルー〉族）からも、ローンケーキは米やトウモロコシの

収穫であることを聞いた⁽²⁰⁾。

(2) 再分配的行為

① 東北部

〈共同作業〉

コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の50代女性の農民によれば、村仕事としてゴミの掃除は特別な父の日（国王の誕生日）と母の日（王妃の誕生日）に共同です（2017年8月聞き取り）。この共同作業は出ないと罰金（出不足金）はないものの、コーラや水、菓子を出してその代償を果たす。別の50代女性農民でクムノイ（小さい組）の代表の話では、父の日と母の日に皆で共同作業をした後昼食はクム（組）の代表の家で食べる。花を植える運動も行っている（国王の葬儀のため）。共同作業に出られないときは飲み物を出す。50代男性の村長によると、もともといっしょに作業することは伝統的な文化で、僧侶が集団で修行に入る入安居いりあんごの祭り（ろうそく祭り）、その他の行事（ブン・バンファイ）では一致協力する⁽²¹⁾。別の50代男性の農民の話では、水路は六軒で利用している。国が管理しているのでバルブの穴を開けるには許可がいる。水路の維持に90パーツかかるが、国が45パーツ出すので残り45パーツを六軒で負担する。特に水路の掃除はしていない。

〈小口金融〉

コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の40代女性によると、シェア（レンチェア）と呼ばれる小口の金融がある（2017年8月聞き取り）⁽²²⁾。普通10人以上ですが、今の村ではなくバンコクの前の職場の親しい人（31人）と行う。標準的な利息は20%で、2000パーツの掛金で400パーツプラスして払い続ける。一人2000パーツで31人で6200パーツ集まるが、これは受け取る人が掛金に利息分を上乗せして払う「積金式」である。本来1ヶ月に1回集まるが時間がかかるため月2回集まり短縮して行い、年間で24人が受け取り残りの7人は翌年受け取る。実際この女性はバンコクまで行かず口座に振り込むことで参加している。シェアは違法とされるが、利息目的で行う者が少なくない。協同組合（サハゴーン）でお金を借りる場合との違いは、組合は利益（約1万パーツ）の中から貸すので毎年貸す金額が変わる。地域の会員をよく知っている担当者がこの人に貸していいかどうかの判断をする。このフォーマルな組合の貸し出しに対して、シェアはあくまでもインフォーマルな仲間内のものである。50代の女性農民の話では、シェアをする地元の人はいない。この点エンブリーが既にタイの農村では「講」（financial credit association）がないことを指摘している（Embree, 1950, p.185）。農民はシェアのような活動が好きではないこともあるが、それに代わる協同組合が機能している。組合の会員になると配当がありお金も借りられる。別の50代女性の農民でクムノイ（小さい組）の代表者によれば、安定した仕事についていないので自分はシェアをし

ない。セラミック工場で働いている娘は一定の給料があるためシェアをしている。シェアではなく生活費のため組合からお金を借りたことはあるが、牛を借りる牛銀行を自分は利用したことはない。50代男性村長の話でもこの村の農民はシェアをしない。60代の男性農民でクムヤイ（大きい組の南地区）の代表者もシェアをしない。60代の女性はシェアは小売業をしていたときしたが今は農民なのでしないと言う。50代の男性農民によると、レンシェアはしないし組合にも加入していない。今の農場は国有地なので加入費を払う必要がない。このように一部の都市生活者を除いて小口金融は行われていない。

②北部

〈共同作業〉

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の70代女性によれば、村長が声をかけて共同作業をする。参加できない人の理由が明確でないと、別のときローンケーキしてほしいと言ってきても手助けしないことがある（2017年8月聞き取り）。このように不参加に対する罰金は特にないが、仲間はずれのようになる。60代男性と50代女性の農民夫婦の話では、父の日や母の日のような特別な日には村民で何をするかを決めて協力する。その内容は学校の図書館をつくるあるいは修理するなどで役割分担が指定される。50代男性の村長（元僧侶）によると、村長自ら呼びかけ宗教関連の共同作業としてお正月や伝統的な行事の準備を指示し、また道路の清掃活動やお寺の清掃作業も呼びかける。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族30代男性の村長によれば各家から一人出て作業するが、出ない人はタイの時給に照らして1日200バーツ払う（2018年3月聞き取り）。共同作業は山火事が延焼しないための防火壁の設置や延焼を防ぐ草刈りなどがある。60代の男性農民の話では、土地は共有で当初7世帯でここに来た。その後皆で共同作業をしながら自分の土地を開墾した。

チェンライ県チェンセーン郡バーンセーオ行政区ターカートーン村の60代女性農民によると、村の掃除や草刈りの作業はあるが、参加しないときは気持ちでお金（約100バーツ）を出す（2018年3月聞き取り）。かつて住んでいたイーサーンの祭りでは皆が協力する。同区メアエーブ村の40代女性のルア族農民によれば、水を守る、橋をつくる、道路整備などの共同作業がある。タイの祭日である父の日と母の日に活動する。各家から一人出て作業するが、出ないとお金を払うか物を買って渡すことがある。

〈小口金融〉

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の30代の女性によれば、農民は必要な資金は「村の基金」（タナカーン・バーン、村の銀行）で借りるためシェア（レンシェア）をしない（2017年8月聞き取り）。70代の女性農民もしないと言う。以前は葬式や結婚式で必要なときお金をもっている人から借ることがあった。60代男性と50代

女性の農民夫婦もシェアはしない。50代男性の地区代表（村長、元僧侶）によると、貧しい人には基金がお金を貸すためシェアをする必要がない。また村として郡の農協のメンバーになっているので、農業協同組合銀行から資金を借りることができる。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族30代の男性村長の話ではシェアはしない（2018年3月聞き取り）。収入がそれぞれありその必要がない。必要なら「村の基金」（村の銀行）からお金を借りる。たまった利息はさらに貧しい人への貸し付けに使われる。お寺には村民が使えるように皆で10万バーツ寄付したことがあった。同じアカ族70代の男性もシェアはしないし、もともとこの言葉を知らない。同県チェンセーン郡バーンセーオ行政区ターカートーン村の60代女性の農民はシェアは違法とされているからしないと言う。同区メアエーブ村の70代、40代のタイ〈ルー〉族の女性農民も「村の基金」を利用するのではない。農村のタイ人も山村の少数民族もともに小口金融をする人はいないことがわかる。

(3) 支援（援助）的行為

① 東北部

〈葬式〉

コンケン州ナンポン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の50代女性の農民によれば、葬儀では地区単位で1軒20バーツ出すが、このうち10バーツはタンブン（寄付、Tambl）の意味をもつ（2017年8月聞き取り）。病死のときは自宅にお坊さんが来るが、事故死のときは寺でする。別の50代女性農民でクムノイ（小さい組）の代表者の話では同額の20バーツ出す。50代男性の村長によると、20バーツ出して親戚が葬儀の手助けをする。この金額は地区で統一されているようである。この他生活向上に関わる組織から一人2万バーツの弔慰金が出る⁽²³⁾。70代男性の農民でクムヤイ（大きい組の北地区）の代表者によると、葬儀では顔を出す程度で、「許してください」（コアホースィガム）という言葉を使うことが多い。これは生前いろいろ手助けすることができなかったことを故人に対して詫げる言葉である。60代男性農民でクムヤイ（大きい組の南地区）の代表者によると、「許してください」の他に「後のことは心配しないでください」と言ってお悔やみの言葉を述べる。

〈結婚式〉

上述のヌーオーノイ村の50代女性農民の話では、花嫁の家でする結婚式を親戚といっしょに手助けする（2017年8月聞き取り）。別の50代女性の農民でクムノイの代表者によると祝い金に2種類ある。招待状を受けた人がお金を出す場合、細い糸で腕を結び幸せになりますようにと手渡しする。50代男性の村長によれば、招待状を受けた人はお金を出し、祝いの品では壁掛け時計やぬいぐるみ、実用品などを贈ることが多い。60代男性農民でクムヤイ（南地区）の代表者の話では、「一生（死ぬまで）お二人で過ごして

ください」と言って祝福する。

②北部

〈葬式〉

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の70代女性によれば、死亡の連絡は家族が村長に知らせて皆に伝わる。50年くらい前は1パーツよりも少ないお金を出したが、今は気持ちで出す(2017年8月聞き取り)。お悔やみの言葉として「亡くなった人に悪いことをした行為を許してください」という意味で前述した「コーアホースイガム」、また「コーハイノロイスースカティ」(この世のことは心配しないでください)とも言う。後者はあの世(別の世界)で次の人生を歩んでくださいの意味をもつ。60代男性と50代女性の農民夫婦の話では、弔慰金は箱に入れ同様の言葉で死者に話しかける。葬儀の日程は3日間で、病院で亡くなると家の外のテラスに遺体を安置し家の中には入れない。50代男性の地区代表(村長、元僧侶)のよると、同じクム(組)の人が火葬のための箱をつくる手助けをする。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族30代男性の村長によれば、アカ族のやり方を踏襲している。土葬で村民の協力を得て墓穴を掘るが、祖先の霊が宿る森の中に墓標はなくただ埋めるだけである(2018年3月聞き取り)。同じアカ族70代の男性の話では、死ぬことは不幸なことだと信じてきた。このためお悔やみの言葉では「あなたが死んで、ここに生きている人のことを守ってください」と言う。仏教と同じように、生まれ変わることを、年をとることを、痛くなることを、亡くなることは普通のことであるとアカ族も信じ、死に直面して悲しみをやわらげてきた。同県チェンセン郡バーンセーオ行政区ターカートン村の60代女性農民によると、死者が出ると村民の協力をお願いする放送があるので、場所や火葬、棺など葬儀の準備など喪家の手助けに参加する。同区メアエーブ村の40代女性のルア族農民の話では、タイ人との結婚が多くタイ式の火葬で親戚の葬儀の手助けをする。タイ〈ルー〉族の70代と40代の女性農民はルー族の土葬ですと言う。

〈結婚式〉

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の70代女性によれば、新婚夫婦に祖父母が昔の新生活について話をしアドバイスを(2017年8月聞き取り)。新婦はもらったお祝い金で豚を買い料理をする。これは先祖の霊に対してお供えするためで、女性の家族が減ることに対してこの霊の怒りを鎮める意味がある。祖先の霊にお金を差し出す行為は「ヌグエンサイピー」と言う。この言葉は「高齢者になるまでいっしょにいてください」という言葉とともによく言われる。男性が女性の家に行って住むことが多いが(妻方居住制)、昔は結婚の知らせをしなくても、この同居で二人の結婚がわかった。60代男性と50代女性の農民夫婦の話では、普通男性が女性の家に行くが、婿の

親が一人のときは女性が男性の家に行って住むことがある。逆に少数民族（リソー〈リス〉族）やメオ族などは女性が男性の家に行く。この農民の奥さんは自分のとき婚約で10万バーツ、結婚式で3万から5万バーツかかったと言う。婚姻圏は人にもよるが村を越えて広がっている。50代男性の地区代表（村長、元僧侶）によると、男性が女性の家に住む慣行は現在必ずしもそうなっていない。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族30代男性の村長によれば、アカ族の伝統的な結婚式では二日間する（2018年3月聞き取り）。男性が女性の家に行き「嫁をください」と言う。返事を得てから翌日女性の家で式を挙げる。初日はアカ族の祭りをする。同じ村の人との結婚もあるが、近年子供の数が減っている。子供は何人いてもいいが、多いとそれだけ生活費の負担が増えることが少子化の原因になっている。村を出る人は女性に多い。同じアカ族70代の男性の話では、一般に男性が女性の家に行き暮らす。結婚式当日女性は男性の親戚の家に泊まる。翌日女性を婿の家に連れて行く。お祝いの言葉では「老人まで子供がいますように。病気にならないように、いつまでも健康に」と言うことが多い。

同県チェンセーン郡バーンセーオ行政区ターカートーン村の60代女性の農民によると、東北地方（イーサン）の伝統的な結婚式がある（2018年3月聞き取り）⁽²⁴⁾。水牛を殺してイーサンの料理をする。「バイキンドン」（バイは行く、キンは食べる、ドンは結婚の意味、結婚式に来ていっしょに食べましょう）という言葉で迎える。結婚する二人の手首に紐をつけて祝うが、この紐は仲良くいつまでもともに暮らすという意味が込められている。同区メアエーブ村の40代女性のルア族農民の話では、ルア族の服を着た結婚式で「生活ができますように、子供がたくさん生まれますように」というお祝いの言葉をかける。今はタイ人との結婚が多い。タイ〈ルー〉族の70代と40代の女性農民によれば、中国人と結婚する人も多いがルー族式の結婚式をする。料理は中華で、結婚する二人の手首に紐をつけるタイ式ではない。なお女性組織は年齢関係なく参加できるが、このメンバーが結婚式の料理などの手助けをする。この村は各民族の共生と言っても婚葬儀にはまだ各民族の習慣が残っていることがわかる。

3. 日本の互助慣行との比較

(1) 日本の集団主義とタイの個人主義

① 共助意識と共有地（コモンズ）

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村の30代男性の村長によれば、かつてアカ族は共有地を分け合っていた（2018年3月聞き取り）。森（バー）が共有地として残るが、地域の森、収穫の森、植林の森、死者のいる神聖な森の四つに分かれる。地域の森では木を切ることはできないが、収穫の森では家の建材を伐採してもよく、動

植物は両方の森で採ることができる。森の中では各自の土地が外見では区別がつかず渾然一体化しているが、土地の境界を地域住民は当然把握している。コーヒー以外に梅の木などもあるが、これらは一体となって植えられ品種ごとに区画されているわけではない。これは同一種だけ植えると土壌が早く弱くなるからとされる。少数民族は別にしてタイ人の農村では聞き取りをした範囲では共有地は認められなかった。ここで言う共有地とは住民会議の場ともなる寺院や守護霊ほこらの祠以外に地域住民が共有する共有田などをさしている。私有地化によって個人主義が浸透する。タイでは「プトワエーン」（自らにたの恃む）ということわざがあり、これは他者への依存よりも自らを信頼することを意味する（河部，1997，37頁）。ここで個人主義とは集団よりも自己の利益に重きを置き全体の規則や規範よりも個人の自由な意志が尊重されることを意味する。タイの農村が開かれたゆるやかで「柔かい社会」（a loosely structured social system）である点は既に指摘されてきた（Embree, 1950）。この点集団主義が強い「硬い社会」でないことがわかる。

共有地の有無という点で日本の農村との大きな違いがあり、そこに互助慣行の違いも見い出せる⁽²⁵⁾。日本では共有地を独占的に使用することを許可して困窮者を救済する仕組みがあった。それが親島の属島周辺で魚介類の採取を認めるモヤイ島や内陸部の山に入り動植物の採取や炭焼きができる山あがりの制度であった（恩田，2006）。貧しい人にモノをあげることはあるが、共有地には誰でも入ることができたので（オープンアクセス権）、特定の人が生活のために占有することはなかったとされる⁽²⁶⁾。森や海も共有地としての明確な意識というよりも誰でも自由に利用できたという点で、日本の「口明け」（採取解禁日）の設定もそれほど明確ではないように推測される。このため資源の枯渇に対する意識、すなわち環境意識は希薄な面もあるだろう。共有地として利用されてこなかった、あるいはその利用が少なかった点で集団主義とは異なる個人主義的な生活様式がうかがえる。

東恩納はタイでは家族主義が希薄なことを指摘している（東恩納，1941，28-35頁）。これは祖先の位牌も先祖代々の墓地が存在せず系譜や系統性の観念が希薄であるためとされる（水野，1981，102-128頁）。日本の「家」としての家族集団の観念が強いのと対照的に、タイでは家族は一世代一夫婦を基盤とした個人中心で無定型性や非永続性として捉えられる⁽²⁷⁾。こうした家族から成る農村でも共通の先祖としての村落の守護霊への信仰があり、その点で共同体という社会空間が構成されている（佐藤，2009，21頁）。しかしそれは個々の家の祖先というより地区の守護神への信仰が強いことを意味する。もちろん村内ではローンケーキの労力交換や共同作業、冠婚葬祭の手助けなど共助の多様な形態はあるものの、日本ほど強い集団志向は見られない。なお調査した村落では日本のような葬式組は確認できなかった。その分公助として協同組合の仕組みが浸透している。

コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の40代女性の協同組合（サハゴーン）の店舗管理者によると、組合費（100バーツから500バーツ）を払う会員は136人いる（2017年8月聞き取り）。この組合の割戻金はたとえば10万バーツの支払いに対して6000バーツ戻る⁽²⁸⁾。店舗経営の利益の中から生活困窮者に3%の利息で共同組合が資金を貸す。1000バーツ借りると、毎月の利息30バーツで年額で1360バーツ払う。こうした協同組合が機能しているため、逆に他の共助が見えにくい面もあるだろう。同村の50代男性村長の話では、協同組合の店は約70%くらいの村にある。しかしこの種の店舗が以前はあったがなくなったところもある。チェンマイ県セミヨン郡マエサブ村オムローン地区の70代の女性によれば、10年前に農業協同組合の共同店舗があったが担当者がいなくなりなくなった。

また牛銀行のような公助もある。コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の70代男性の農民でクムヤイ（北地区）の代表者によれば、正式な名称はRoyal Cattle Buffalo Bank for Farmers（タナーカーン・コーレガブー）で国王の方針で制度の導入が決められた（2017年8月聞き取り）。10年くらい前の話でメスの牛がこの村に2頭きた。いずれも子牛を産んだが、そのうちの一頭が病気で元気がなく子牛を産まなくなると追加で1頭来た。しかし結局次の人に母牛がまわらず機能しなかった。一般に子牛を産むのに8ヶ月かかる。与えられた牛が病気で亡くなるあるいは所在が不明になると、契約が履行できない代償として7000バーツ国に現金で払う契約になっている。個別の契約で子牛が生まれそれを得た段階で契約が終了し、次の母牛の受取人が契約をする⁽²⁹⁾。チェンマイ県セミヨン郡マエサブ行政区オムローン村の50代男性村長（元僧侶）の話ではトラクターなどを使うため、この村では牛銀行を導入する必要がなかった。牛銀行はNGOがその最初の購入資金を提供する場合もあるが、これは内助というよりも外助で政府主導の公助が機能している分共助はそれだけ強くないことが推測される。

②タイの小口金融

タイの個人主義志向の論拠として小口金融の導入とその利用に求めることができるだろう。既に述べたレンシェアはレン（len）が動詞でシェアをする意味をもつが、一般にはチェア（レンチェア）として「レンチェアマイ」（チェアをしますか）と話すことが多い。このチェア（レンチェア）がタイ人に知られるようになったのは1945年以降のことで、金融システムがよくないので中国人がタイで始めた⁽³⁰⁾。この中国人は共産党が支配すると母国に帰れなくなり、資金を得る手段がないため小口金融を始め、やがてタイ人に普及した。中国人とタイ人の商売の関係もあるが、自然に普及したとされる。言葉の淵源をたどると、シェアは中国語の「社」から入った言葉でshareでもある。ここに韓国や台湾での頼母子の言葉同様「互助慣行の移出入」が認められるだろう（恩田, 2017a: 2018）。1950年代の後半になると、タイの中産階級が貯蓄のためレンシェアを始

めた。給料だけでは大金にならないため、結婚式の車や新しい家を建てる時の資金に利用した。こうして1970年代から80年代末頃レンシエアがブームとなる。

しかし90年以降持ち逃げする人が多くなると法律で規制される（1991年7月13日成立）。これは3つのレンシエアまでしか加入できない、メンバーは30人以下で最低3人でなければならない、すべての掛金（ファンド）の合計は30万バーツを超えてはならないという規則である。その背景には無秩序な状態を規制すると同時に、銀行から借りることができない低い中産階級の資金集めを政府が逆に容認したとも言える。金融機関の貸し付けは企業や有閑階級が対象で、住宅ローンでは銀行に16%の利息を払うためレンシエアで資金が容易に集められる利点があった。また銀行以外にレンシエアの仕組みを使いお金を貸す業者（Crédit Foncier）が生まれ、レンシエアで集めたお金をさらにこの業者に預けて増やそうとする動きも活発になった。このことも法規制の背景としてあった。こうした中産階級の多くは都市に住む華人系市民である⁽³¹⁾。90年代末になると日本からの投資が増え、法規制にも関わらず低い中産階級にまでレンシエアが急速に普及した。しかしバブル経済で銀行システムが崩壊すると、クレジットカードが普及する。1997年以前はカードの発行枚数が120万だったが、99年には1200万枚になったとされる。現在このクレジットカードにより資金を融通できるため、レンシエアは利息目的に変わり、見知らぬ人ともインターネットで利用するようになった。これがまた新たな問題となり、小口金融というよりも大口のマネーゲームの様相を呈している。このためもはや本来の共助としての小口金融とは言えない。

本調査の聞き取りでも明らかのように伝統的な農民はレンシエアをすることなく農村で暮らしている。農民は誰でも森や海を利用することができたため、自給自足の生活ではその必要がなかったと言える。本来の困窮者の救済という意味を離れ、私的な生活の向上という点でも個人主義が典型的に示されている。同時に既述したようにタイの農村では伝統的な小口金融（講）がないという指摘にも注目したい（Embree, 1950, p.185）。これは同種の慣行が見られる日本や韓国、中国、台湾また同じ東南アジアのフィリピンやインドネシアとの違いからタイ社会の固有性を示している。それは救済や共済とは異なる利殖目的の集団としてのまとまりが少ない個人志向（個人主義）から説明できるだろう。タイでは「自生的な社会秩序」としての小口金融というよりも「外生的な経済秩序」としての性格が強く、華僑の定住化過程で外来慣行として「移入」された経緯がこの点を物語っているように思われる。

(2) 少数民族の互助慣行

①単一民族村

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村の30代男性村長の話では、NGOのIMPECT（Inter Mountain Peoples' Education and Culture in Thailand Association,

1991年設立)が25年から26年前に来て、アカ族を始め山岳少数民族 (the Akha, Daraang, Hmong, Kachin, Lahu, Lisu, Lua, Karen, Mien and Shan) の支援を行っている (2018年3月聞き取り)。その内容は伝統文化の維持, 農業の育成, 環境保護であるが, タイ国籍が取得できない民族の人権擁護 (選挙権, 国からの補償など) も行っている。この他AIPP (The Asia Indigenous Peoples Pact, 1988年設立) も人間開発を通じた少数民族の権利擁護の活動に従事している。

複数の民族が暮らす村と異なりメアジャンタイ村はアカ族だけで生活しているため, それだけ民族のアイデンティティの度合いは強いと言える。60代の男性にアカ族の将来について質問すると, 「昔の世代より今の世代が幸せだと思う」と答えた。昔は車もバイクもなく, 町に出るまで暗くなると寝るので往復4日かかった。アカ族の文化 (言葉) は薄れてきているが, それはどうしようもない。それを事実として認めるしかない。「地域の人々がそれを守るかどうか, 自分の世代では守れていたが, 今の世代はアカ族の知識 (知恵) をもてるかどうか疑問だ」と指摘している。それでもアカ族の互助慣行は冠婚葬祭に引き継がれている。この男性の母親はアカ族だが, 父親 (86歳で健在) は中国人である。なお学校の教育はタイ語のみで教え, アカ族の言葉は家の中だけで使われている。

②複合民族村

チェンライ県チェンセン郡バーンセーオ行政区メアエーブ村の40代女性村長によれば, 村の会議室で最低月1回集まりタイ (ルー) 族, アカ族, ラフ族, ルア族, タイヤイ (シャン) 族5つの民族の意見を聞いている (2018年3月聞き取り)。村は12のゾーン (zone) に分かれ, その代表と副村長2名に村長が参加して会議が開催される。この12の地区代表者は住民から尊敬を得ている人がなり, 地区住民は民族単位で区画されているわけではない。この点5民族の融和と共生がされていることがわかる。この代表者会議ではドラッグ (麻薬) や焼き畑の煙, 安全, 健康についての問題を議論し, 様々な情報伝達をする。民族問題よりもむしろタイ人としてのアイデンティティに関わる問題について話をする。民族は異なるがタイに住む地域住民の立場は同じで, このためタイ人の村落という意識から国籍取得を共通の取り組むべき重要課題として位置づけている。全体としてタイ人のナショナル・アイデンティティがエスニック・アイデンティティに代わる面が強いように思われる。より正確に言うと, それはタイ人のアイデンティティへの移行過程として捉えることができるだろう。換言すれば, 少数民族では弱い力を複数民族の力 (コミュニティ・エンパワーメント) を蓄積し乗り越えようとしているように見える。このナショナル・アイデンティティへの意識は言葉の面にも表れている。この地域での共通語はタイ語と中国語である。より大きな社会的勢力をもつ言語が支配的であるのは他の複合民族の国家も同様である。特に地域の問題について女性村長に質問

すると、教育の問題が大きいと言う。タイ語を話すことができない子供や大人がいるため不利な立場にある。幼稚園から小中高とタイ語を学ぶ機会があり、英語の授業もある。この他中国語を教える外国語学校もある。この点中国人との結婚が多いため中国語の需要が多い。ただ配偶者がタイ人や中国人ではその習慣に従うこともあるが、冠婚葬祭など節目の行事ではそれぞれ民族固有のスタイルが維持されている。

4. タイの互助社会

(1) 「開発僧」の取り組み

①人間開発と農村開発

〈開発僧とは何か〉

タイ東北部のコンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の50代男性の村長によると、「開発僧」はお寺や村の学校で文字を教え農民に貯金を促す活動をしている（2017年8月聞き取り）。「開発僧」はプラ・ナックパッタナー（プラは僧、ナックは者、パッタナーは開発の意味をもつ）と言う。資金を集め学校や診療所などの施設を地域社会でつくるが、この地区には小坊主のいる寺はあっても「開発僧」はいない。一般の僧侶は地域によって違うが、たいたいBan（行政村）単位に二人いる。ここにも二人いる。二人が托鉢で二つのクムを回るが、ここクムノイ（小さい組）は年配の僧侶が足が悪いためスクーターで托鉢をしている⁽³²⁾。

チェンマイ県セミョン郡マエサブ行政区オムローン村の70代の女性によれば、僧侶が村民を仕事に参加させる（2017年8月聞き取り）。資金を得る知識を使い、自然の素材からシャンプーを作るなど商品開発の指導もする。村民がお金を得たらその半分はお寺に寄付する。「開発僧」は実践的な知識の教育をする人で、村を開発して収入が実際増えた。オムローン村はクムオムローンとクムファボン（充足経済地区）に分かれるが、前者の代表はオムローンの村長で、後者の代表が開発僧である。本来オムローンはクムが一つだったが、「充足経済」を進める僧侶が独立してクムファボンとして分かれた。この「充足経済」はラマ9世が唱えたもので、地域（土、水、森）に合った自給自足の経済を示す。

60代男性でマエサブ地区行政機構のメンバーの話では、「開発僧」と行政とは仲がよくない。10年前から来て「充足経済」によるニンクづくりなどいろいろな取り組みをしているが、村長に相談しないで自分たち独自でやっているため行政とのコミュニケーションがはかれていない。「開発僧」が来て一つのクムが二つに分かれるなど、行政との取り組みがかみ合っていないところもあるが、今後地区全体の開発という視点から公助（行政）と共助（住民）の補完関係が望まれる。

〈活動の理念と内容〉

このオムローン村で活動し充足経済センターに住む開発僧から話を聞くことができた(2017年8月聞き取り)。その内容は以下のとおりである。活動の理念としての「充足経済」はモノとココロともに解放できると考える。この僧侶は10年前に地域の問題を解決するためボランティアとして来たが、当時雨季で水の量が多く雨量をさばくこと(排水)ができなかった。しかし農業ができるのは雨季だけで、森を守るため雨の貯水池をつくった。人間は自然に対して敵対することがあるが、1年に1回米が獲れるという自然に対して感謝の気持ちをもつことが大切である。森の質が見えると森に対する愛する心、すなわちいつくしみの心も強くなる。人間と自然の共存を目指して植林をした。人間を助けるにはどうしたらいいのか。森を維持することを考えた。夏火事があるので住民が水を貯める堰を造り守るようにした。水分を多くもつ木を植えることで失火を防ぐことができる。森ではハーブなどを作る。またここでは農業をする人が少なく、農業をやめるのは人から資金を借りてその返済のため都市に出る人が多いからで、収入を得ることを農民に考えてもらい、同時にお金のいい点よくない点について教えた。さらに米以外にトムモロコシも作っていたが、自分に必要なベーシックニーズを考え食べ物、薬、住まいの4つを大切にすることを教えた。自分にできることを始めにすることが肝要である。この他生活改善として無駄な出費を抑えることを強調している。農業収入は低いがその内訳を調べてみると、食べ物3500パーツ、石けんやシャンプーなどの日用品、肥料1万パーツで、生活費を切り詰めることで貯金ができることがわかった。石けんやシャンプーも自分でつくり、化学肥料ではなく自然の肥料を使うようにした。

こうした基本的な活動の他にホームスクールがある。このスクールのコースは各地で異なり必要な内容を教える。小さいときの教育が大切で小学校から高校生までが対象で、成長して地元に残りその知識を活かすように指導している。20人くらい集まりお寺で先輩が後輩に教えるが、僧侶が直接授業をするのではなく各分野をよく知っている人が先生になる。僧侶はあくまでも管理指導者の立場にある。農協コース、森を守るコース、シャンプーを作るコースなどがあり、小学校から中学校ではシャンプーの意味を教え、高校生にそれを販売する方法を教えるなど年齢によって教育内容を変えている。

訪問した充足経済センターの敷地内にニンニクの工場がある。ここではガリアン族(タイ語でガリアン、英語でカレン族、首の長い民族と普通の民族がいるがここに来て居るのは後者)がこの工場働いている。ニンニク栽培は誰もが幸せになるための収入源と位置づけられている。誰でも簡単に植えられることが大切で、誰かが病気になっても代わりに作業ができるようになっている。ローンケークで作業をし、当日(日曜日)は19キロ離れた村から35人ほどが当番のため来て、いいニンニクとよくないニンニクを選別して袋詰め作業をしていた⁽³³⁾。

〈「開発僧」の使命と将来方向〉

この僧侶は10年前にオムローン村に来たが、仏教の教えに感動して僧侶になり6年目

である。「開発僧」の話では普通の僧侶との違いはないとするが、一般の僧侶よりも住民に寄り添う活動をしている。「開発僧」という名称は住民がそう呼んでいるだけで自分たちは言わない。タイ全体では北部、東北部、南部の各グループがある。1976年頃からこの種の僧侶が活動したが、その後87年頃から活動が順調にいくようになった。タイ政府の税金の使い方がよくないので、住民が国ではなく僧侶を信頼するようになり活動が軌道に乗るようになった。

将来の活動では、病院が離れたところにあるので住民（平均年齢55歳）の健康増進に取り組みたいとする。また人間開発を通して仏陀の教えを広めたいという意向も持っている。人間開発（capacity building）は社会開発の中に位置づけられ、意識化（conscientization）とセルフ・エンパワーメント（self-empowerment）から成る（恩田, 2001）。前者は今自分が置かれた位置に目覚めることで、後者は自立（self reliance）、自助（self-help）、自決（self determination）の力の向上を目指す。もともと開発には西洋的なモノの開発（かいはつ）と東洋的なココロの開発（かいほつ）がある。人間開発はこのココロの「かいほつ」、すなわち目覚めに他ならない。「開発僧」の活動は仏教に基づく人間開発を基調に具体的な「充足経済」の活動を進めている。

なお北部のチェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村のアカ族のところにも開発僧が一人いて生活支援をしている。もともとアカ族は祖先崇拝の自然信仰で仏教徒ではないが、この「開発僧」が仏教による救済を説いている。上述したように、人間開発を通して自己が他者と向き合うことで他者へのまなざしが促進される。なおタイ全体でアカ族は280村ほどあるが、キリスト教徒が多く自然崇拝のアカ族は10村以下である。このような仏教の教えをより実践的な活動として取り組む僧侶が「開発僧」に他ならない。

②地域の問題

コンケン州ナンボン市クドナムサイ行政区ヌーオーノイ村の50代の女性農民によれば、地域について特に問題はないが若者の農業離れがある（2017年8月聞き取り）。それでもマイペンライ、すなわち「寛容（どうにかなるさ）の精神」で暮らしている。50代女性農民でクムノイ（小さい組）の代表の話では農業の後継者として娘がいるが、無理なときは親戚に頼む。ただ27歳の息子が家でぶらぶらしているので不安であると言う。土地は財産として受け継ぐため売ることはしない。これに対して50代男性の農民によると、農業を受け継ぐ者はいないがマイペンライで生活している。後継者がいないときは土地を売る。70代の男性農民でクムヤイ（大きい組の北地区）の代表が一番の問題はコミュニケーションで、何かことを始めるのが遅く、グループをつくり新しいことをするのが難しい点を指摘している。また苦情を言っても上の組織の行動が遅い。60代の男性農民でクムヤイ（大きい組の南地区）の代表の話によると、ドラッグ（麻薬）の問題が大き

く、役人が吸っていることもある。農業の後継者については最後人を雇ってでも農業を続けたいとしている。Ban（行政村）の代表者は地区全体を広く見ているが、50代男性の村長もドラッグの問題が大きいことを指摘している。日本ではどうかと質問されたが、日本は少子化が進行していることを話すと、この地区では一家庭の子供の数はだいたい二人であると言う。なお日本のNGOについて質問したがこの地区では活動していない。

チェンマイ県セミヨン郡マエサブ行政区オムローン村の30代女性によると、若者は農業ではなく都市の安定した会社員として毎月給料をもらうことを好む（2017年8月聞き取り）。70代の女性の話では、生活は普通だが道路がよくない。ドラッグの問題もある。また暇をもて余す若者がいるが仕事をしない者は困る。少子化について質問すると、女性はだいたい子供を2、3人生む。50代男性の村長（元僧侶）によれば、政府からもらった資金で基金をつくるよう言われ事務所をつくろうとしたが、この地域に必要な水関係の施設をつくることにした。この村は何よりも収入が少ない。ローンワークも賃労働が多くなった。この他道路整備や若者のドラッグの問題もあり、さらに高齢者が増えているのでその世話の問題もある。マエサブ地区行政機構のメンバーである60代男性の話では自分は地域の問題を取り上げる立場にあるが、特に貯水池の浄化の問題が大きい。またヤーワン（甘味草）は売るために乾燥しないといけないが、乾燥に使う炭で地域の環境が悪化している点も指摘している。この乾燥にはオープンがいいとする。さらに道路整備が十分でなく、村から町の中心部に行くのに乗合バス（ソンテオ〈テウ〉）が1日1便で交通が不便である。この他教師が少なく子供がいないので地元の小学校が廃校になる点も心配だとする。廃校になれば別の学校に通うため交通費もかかる。中学はこの村にはない。日本同様村の高齢者が増え、現在人口約500人のうち60代以上は90人ほどだが将来増えると予想している⁽³⁴⁾。

チェンライ県メーサーイ郡タコ行政区メアジャンタイ村の30代男性村長によれば電気の問題が大きく、コーヒー焙煎のために電気が必要でソーラーシステムも利用しているが十分ではなく発電機を使っている（2018年3月聞き取り）⁽³⁵⁾。また村内の道路は舗装されていない。農産物ではコーヒーの買い取り価格が安い。土地の問題ではアカ族は要望しているが、国から土地の証明書が発行されない。自然資源を保護するため畑や森の土地は個人の土地売買を制限し村単位で行う。医療問題では地区に診療所はあるが、重い病気のときは都市の病院を利用する。40代女性農民の話では、若者のふるさと離れでは村の外に出てもいいが、そこで生活できなくなったときは戻ってきてほしい。年をとってから戻る人もいる。同県チェンセーン郡バーンセーオ行政区メアエーブ村では既述したように、タイ国籍の取得問題が大きい。40代の女性村長によると、現在1200人から1300人がもっていないため政府に国籍取得の働きかけを行っている。聞き取りをした40代ルア族の女性はタイ国籍はないが在留カードは所持している。この他村の観光地化には反対しない。民族固有の生活が守れないというより生活がよくなるため変わること

で収入が増えればいいと考えている。70代と50代女性農民（ラフ族）の話では、若い人は地域から出てまた戻ってくる人が多いので農業の後継者はそれほど心配していない。健康面では地元の野菜を食べるようにしている。病気をしたときは地域の開業医に診てもらおうが、重い病気の場合はチェンセーンまで行く。

以上のような各地区の問題はそれぞれ住民の代表者を通して話し合いを行い、地道な解決に向けた取り組みがされている。こうした共助である住民の内助で十分でないときは国の支援として公助を受ける。しかし少数民族の国籍取得問題のように難しい面があり、「開発僧」や外国NGOの支援を受けながら農村開発が進められている。

(2) タイの国民性から見た互助慣行

① 仏教と互助慣行

仏教と互助慣行の関係はどうであろうか。インドネシアではイスラム教のザカートのように数量を含め寄進が明確に制度化され、またヒンズー教では同様にプニアがある(恩田, 2017)。数量規定はそれほど明確でないもののタイでは僧侶の托鉢に対する寄付がタンブンとしてされている。これは徳を積む行為(功德積み)で寺院や僧侶への寄付だが、他者への支援の意識は希薄なところが散見される。もとより各自の状況に応じて寄付をするが、僧侶への寄付はあっても同じ村民への支援が少ないように思われるのは、それだけ個人とブッダの向き合いという個人主義が強いことを示唆している。もともとタイの仏教は戒律の厳しい上座部仏教(かつての呼称は小乗仏教)で、日本の大乘仏教のような誰でも成仏し悟りを開くことができる宗教とは異なる。それだけ個人レベルの行為が重視されていると言えよう。その分タイの僧侶と一般人の関係はお布施を通した相互扶助の関係が強くなる。その多くは食べ物の贈与による相互関係で、日本のような金銭的な関係が希薄であるのは経済水準の違いもあるだろう。もちろん寺院が貧困者に施しをするという救貧行為は地域住民の寺院へのタンブン(寄進)を通してされる点で、住民が相互扶助を担っている面もある。すなわち寺院が地域住民の救貧行為を肩代わりしていると考えられる。このタンブンを通して住民の精神的な安定を仏教がもたらしているとは言え、村民が仏教と直接向き合う分同じ住民に対する互助意識は希薄のように思える。これは換言すれば相互の無関心(不干渉、無干渉)ということで、別の視点から見ると責任を回避する他人任せ(レオテーの精神)でもある⁽³⁶⁾。仏教は共助よりもブッダとの^{あいたい}相対関係を通した自助を求めていると言えよう。

また日本のような祖先というタテの社会関係も希薄である。ただタイでは「重層信仰」として仏教以外に庶民信仰の森羅万象すべてに霊があるとする精霊崇拜(アニミズム)が併存している(水野, 1981:162-1185頁; 河部, 1997, 2-8頁:17-24頁)。特に地方の農村ではむしろ后者の土着習俗の信仰が強く、外来宗教としての仏教を受け容れながらそれらが庶民生活の中に混合している⁽³⁷⁾。この点他のアジア諸国も同様だが、タイ

では精霊崇拜が快適な心としての「サバーイ・ジャイ」(河部, 1997)をつくるよすがになっている。心が満ち足りた平安な暮らしが理想とされるのは仏教が上層権力の権威づけに利用されてきた点の反動として捉えることもできるだろう。タイは外来と土着の文化から成る植民地支配の遺制としての二重社会ではない、庶民から見た聖なるものと俗なるものという二重構造がその平穏な暮らしの切望と結びついているように思われる。この点「開発僧」の仏法に基づく農村開発の行為は権力層を支える高貴な仏教ではなく、それをより庶民層につなげる役割を果たしていると言えよう。

宗教活動から社会活動への発展は先に述べた「開発僧」による行為が大きい。この点は自殺防止のネットワークを展開する僧侶のNPOもあるが、寺院内の活動が多い日本の僧侶との大きな違いが見られる。タイでは一般に村落あるいは近隣の複数村落の集会場として、また集められた寄付を貧困者に分配するなど寺院が地域のコミュニティあるいは福祉のセンターとしての機能を果たしてきた(Kaufman, 1960; Potter, 1976; 佐藤, 2009)。日本の村落で同種の機能を果たしているところもあるが、「開発僧」の場合、それが農民とともに汗をかく実践的な行動と結びつき、単に宗教上の教えにとどまらない農業や自然環境の教育に従事している。しかも次代を担う子供たちの教育にも熱心で、読み書きそろばんの学校教育とは異なる生活教育がされている点は注目される。チェンマイ県セミョン郡マエサブ村オムローン地区の「開発僧」は森との共存、シャンプーの生産、子供たちのホームスクール、ニンニク工場の運営など生活に密着した事業を展開している。このように宗教が単に精神生活の支えだけでなく日常活動と結びついて生活の中に深く浸透している点は日本と大きく異なる。

②タイの国民性—相互扶助の精神(ナムチャイの心)とマイベンライの精神

どの国民もそれぞれ独特の精神をもっている、この点相互扶助はそれほど特徴的なものではないかもしれない。それは大なり小なり健全な共(同)感をもつ者なら誰でも抱く感情だからである。タイでは先に述べた仏教の教えからタンブンとして寄進の行為が僧侶にされるが、それが一般の他者に向かうことは聞き取りをした村落では少なかった。それだけ公助への依存が強いあるいは公助が制度化されている証左と言えるだろう。この点村落全体で支えるという意味で日本のような集団主義は少ないように思われる。むしろ個人主義が支配的で公助と自助を求める傾向が強い。逆にそれだけ他者に気を遣う余裕がないことを示唆している場合もあるだろう。これは調査した村落でも生産基盤となる共有地がほとんど見られなかった点とも符合する。土地はあくまでも自分たちの自給自足のためあるいは換金作物を得る重要な資源であり、所有関係を明確にすることで個人の生活を支える。日本でも共有地は少なくなりほとんど見られなくなったが、寺院や守護霊の祠は別にして共有地を通してお互いに生活を支え地域住民が一体感をもつことは少数民族の村落にはあってもタイ人では少ない。地域の開拓に貢献した集合的な先

祖霊（先祖祭祀）はタイ人村落にもあるとされるが、仏教信奉に対する伝統的な功德を得るための慰霊は日本のように祖先に限定されない。むしろ自然への畏怖と同時にそれを鎮める行為が精霊信仰として行われてきた。これらが「悪いピー（精霊）」を避ける儀礼奉仕として個人レベルの生活を中心とするなら、仏教はより大きな集団や地域全体に関わる生活の救済に結びつく度合いが強いと言えよう。もとより「自生的な社会秩序」としての互助慣行は宗教的な慈悲救済の精神に基づくものではなく住民間の支え合いによるが、それが宗教と結びつき為政者に利用されることが少なくない。

集団志向は日本に比べるとタイは希薄なところが散見される。この希薄な共助は少数民族では国籍取得問題が大きいため、逆に公助に頼れない分民族内の支え合いが強い。山岳地帯に住む少数民族ではタイ人社会との接触が少ない分それだけ民族の団結力も強固である。土地を公認されないため隔絶した山間部で住むことを余儀なくされると、それだけ集団の凝集性も高くなるのは当然であろう。特にアカ族のような単一民族で暮らす山村ではその分強固な共助が保たれる。それに対して単独の民族では暮らすことが難しい場合、複数の少数民族の共生が見られる。調査したチェンセーン郡バーンセーオ行政区メアエーブ村では、中国雲南省のシーサンパンナ（タイ〈ルー〉族自治州）での内戦あるいは土地を離れざるを得ない流浪の身という共通体験で結びつくタイ（ルー）族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ（シャン）族共生の村落では、域内の地区も民族別ではなく地域単位の混合が進んでいる。これは異なる民族の共生を通してタイ人としてのナショナル・アイデンティティを求める動きでもある。しかしその一方でナショナル・アイデンティティを求める動きがかえって民族固有のエスニック・アイデンティティへの自覚を促すこともあるだろう。これは冠婚葬祭の民族性に表れている。

タイ人は相互扶助の精神（ナムチャイの心）をもっていると言われる⁽³⁸⁾。これは村落共同体の慣行とされるが、調査したムラ社会では個人志向が強く村落全体の相互協力はそれほど強いとは言えない。本来「ブン・クン」（恩）を受ければ「カタウェティー」（報恩）が対になり恩返しをする行為から人とのつながりや調和を重んじる規範が強くなるとされる（水野、1981、207頁）。この恩返しを尊重するという行為は自己満足あるいは自己完結の態度に結びつくため、逆に個人志向を強めることもあるだろう。仏法によるタンブンという寄進の精神だけは強く作用していることがわかる。しかし既述したようにそれが僧侶だけでなく、一般の他者に向かわずお互いの生活の現状を受け容れる態度になるとき、途上国固有のあきらめのような感情が支配的となる。これがマイペンライという広い意味での寛容の精神と同時に現状を受け容れる態度として示される。この言葉は様々な状況で使われるが、一般に現状を肯定する行為の言葉とされ、日本の沖縄のナンクルナイサ（どうにかなるさ）同様の意味をもつ。先に述べたもう一つ伝統的な価値観として言われる快適な心である「サバーイ・ジャイ」も、平穏無事な現状を肯定する。現状に対する改善を求める動きが少ないとき、ありのままを容認する態度から

は「生活の知恵」を活かして全体をよくしていこうとする相互扶助に結びつくことは少ない。ただ婚葬儀はシュアイ (help) という言葉で手助けがされている。これは公助に馴染まない領域でもあるが、あえて相互扶助の精神 (ナムチャイの心) を強調するところに、逆に地域住民間の支え合いが希薄な点が示唆されているように思われる。

5. 結語

本論文は日本の互助慣行をタイと比較し類似点と相違点を明らかにすることを目的とし、このため日本のユイ、モヤイ、テツダイという互助行為の分類に基づいて、2017年8月東北部コンケン近郊の農村、北部チェンマイ近郊の山村、2018年3月北部チェンライ県メーサイ郡のアカ族山村、チェンセーン郡の農村、少数民族 (タイ〈ルー〉族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ〈シャン〉族) 共生の山村で聞き取り調査を実施した。限られた調査日数でタイ全体について言うことは難しいが、一定の知見は得られたように思われる。特にタイ人の村落だけでなく、少数民族の互助慣行について現状を知ることができた点は大きな収穫であった。この少数民族も単一村落と複合村落の場合で比較することができた。これもまた新たな知見を得る機会となった。

日本のユイにあたるローンケーキ (労力交換) が機械化により衰退しているが一部まだ見られる。またチェンマイ近郊の山村では仏教の教えに基づく「開発僧」による農村開発が進められていることがわかった。アカ族の山村ではケシからコーヒーへの転作で発展する一方伝統的な文化の継承が困難になっている。共同作業はどの村落でも見られ地域住民の一体感が維持され、不参加の場合過怠金を科す点は日本と同じである。金銭的支援として小口金融のシェア (レンシェア) は農村では行われていない。もともと中国の「社」がタイの中産階級に普及し都市での利殖志向が強い。冠婚葬祭は地域住民の喜怒哀楽が反映される領域で東北部から北部への移住者もその郷里の伝統を踏襲している。特に少数民族では各出身地の生活様式が色濃く投影されているが、その一方でタイ国籍取得の問題が大きく、タイ人のナショナル・アイデンティティがエスニック・アイデンティティに代わる面も否定できない。

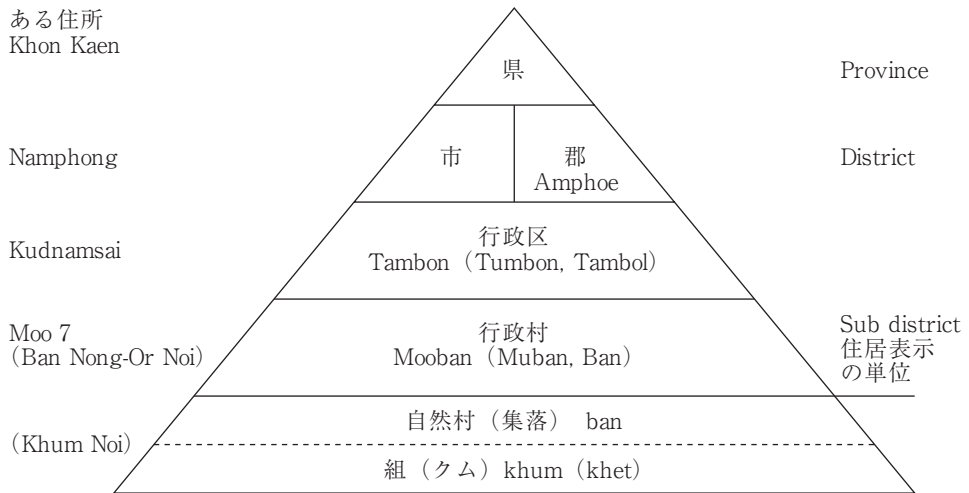
タイではガーンシュールアスガンレガン (ガーンシュールアは手助け、スガンレガンは共有の意味) という相互扶助の言葉があり、思いやり (ナムチャイ) の心が言われている。しかし困窮者への救済では協同組合 (サハゴン) の利用が多く、共助というよりも事実上公助への依存が強いのは他者への関心が向かないほど農民が困窮しているからとも言える。その一方で公助や自助への要請は急速に進む個人中心の生活様式の改善という近代化の証左とも言える。調査した農村では共有地 (コモンズ) はほとんどないが、アカ族では保護森、収穫森、神聖森があり環境保全がされている。タイでは日本と異なり集団主義より個人志向が強く、仏教も祖先崇拜とは結びつかず個人レベ

ルの救済への祈りが精霊信仰とともに多いように思われる。地域で問題があってもマイペンライという寛容の精神で現状に対する肯定的な態度で受け容れてしまうところも散見されるが、少数民族では自民族の共益を意識した互助ネットワークがまだ健在である。今回の知見を踏まえ東アジアとの比較も念頭に、東南アジア（恩田，2016：2017b）に通底する互助慣行の解明が今後の大きな課題である。

*本論文は、平成27（2015）年度から平成31（2019）年度の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」（課題番号15K03860，基盤研究（C））の成果の一部である（研究代表者〈個人研究〉恩田守雄）。

〈注〉

- (1) 2017年8月のタイ東北部ではコンケン大学教育学部日本語教育課程のWattana Vithianthiab君、同年同月と2018年3月の北部ではチェンマイ大学人文学部日本語学科のNattanai Thassananuphrom君に通訳をしてもらった。
- (2) この聞き取りは自宅ではなく田畑近くの作業場で行った。農民の住所は13 Moo7 (Ban Nong-Or Noi), Tambon Kudamsai, Namphong District, Khon Kaen Provinceだが、13 Moo7, Tambon Kudnamsai, Namphong District, Khon Kaen Provinceで郵便物は届く。村の略称としてのMoo (Mu) の番号はTambonの下での行政区域を示し、この番号だけでMooban (Muban) としての行政村が特定される（図：「タイの地方行政」参照）。この聞き取りをした村はBan Nong-Or NoiでBanは村の意味だが、もともとbanは家、複数の家（集落）の意味をもつ。従って人々が集落を形成しともに暮らしていく自然な単位としてはbanになる。moo (mu) は集合の意味をもつため、この自然村としてのbanがいくつか集まることでより大きな単位のMooban（行政村）になる。このMoobanは地方によっては単にBanとされるところもあるが、これはMoobanの略で自然村としてのbanではない。日本ではこうした集落を統治の末端単位として組み込むがタイも同様で、banが複数集まりmoo (mu) として行政団体であるMooban（行政村）がつくられた。このTambonとMoobanは前者を行政村後者を行政区とする場合（北野，1987：1990a：1990b）と前者を行政区後者を行政村とする場合がある（佐藤，2009）。行政村と自然村の関係を重視する点、また自然村の単位を尊重するためその上の単位との近接性から、「自生的な社会秩序」としての互助慣行に着目する本稿は後者の立場をとりたい。このクドナムサイ行政区には10のBan（行政村）がある。その一つ聞き取りをしたヌーオーノイ行政村の人口は780人1世帯4人くらいで、このBanの下での単位にクムノイ（小さいクム）とクムヤイ（大きいクム）という2つのクム（組，khum）があり、それぞれ代表者がいる。その人口の割合は前者が3分の1（260人）後者が3分の2（520人）くらいである。クムヤイは地域が大きいのでさらに二つの北地区と南地区のシュムシヨン（community）から成る。ただし日本の五人組や隣組のようにもともとある住民の近隣組織を為政者の統治単位として活用する点はこのクムという単位にも表れている。家並みに沿った区分としてのクムには「支配」という意味が含まれ、その後このkhumは単に地域の区分を示すkhetという名称に変



Tambon (Tumbon, Tambol)：行政区とされる。なお「一村一品」運動がタイでも導入されているが、この英語訳はOne Tambon One Product (OTOP) となっている。

Mooban (Muban)：行政村とされTambonとMoobanは前者を行政村後者を行政区とする場合もある(北野, 1987:1990a:1990b)。

Moo (Mu)：住居表示の単位でMoobanの略とされる。

ban：この集落(自然村)は歴史的に古いところでは親族集団を中心にした小集落から構成されたと考えられる。このbanという集落が複数集まりMooban(行政村)が構成されるが、一つのMoobanが一つのbanから成る場合もある。

khum (khet)：組(クム)という単位はBan(Mooban)の下にあるが、これは自生的な近隣組織が統治単位として再編成されたとされる。

図：タイの地方行政

わった点は長年タイ農村を研究してこられた新潟大学の佐藤康行先生から教えていただいた(2018年6月)。なおヌーオーノイの村長は選挙で選ばれ1期5年で同じ人がすることが多く、その人物に対して苦情があると選挙が行われる。またこの地域の寺院は「一村一寺」ではなく2つある。Wat Ban(ムラのお寺)とWat Pa(森のお寺)があり、後者は外に出ない僧侶がいる。Wat PaはBan単位に必ずあるわけではない。

- (3) 米は年2回収穫し(11月と4月)、畑作ではニンニク、ネギ、とうがらし、パパイヤを植えている。面積は8ライある(1ライは1600m²)。なおタイでは日本の「一村一品運動」(OTOP: One Tambon One Product in Thailand)が行われている。一つのTambonで一つの生産物を育てるという取り組みである。
- (4) この農民は米を11月と5月の年2回収穫し、他にバナナやノーイナー(シャカトウ)をつくる。土地は2ライ所有している。
- (5) ヌーオーノイ村には村長を補佐するアシスタントが二人いる。なお村長の給料は公務員として国から資金が支払われ、インドネシアのような土地の支給はない(恩田, 2017b)。
- (6) 米は年1回の収穫で、トウモロコシを育て牛を3頭飼育している。田(稲)には2種類あり、年1回収穫で7月田植えをするナーピー(ナーは田、ピーは年の意味)と乾期の田植えと雨期以外に田植えをして年2回収穫するナーバン(プラン)がある。ナーピーは一

- 定の長さがあるため疲れずに稲刈りが簡単にでき、雨期に田植えをするがよく成長する。もう一つのナープランは背が低く刈り取りに苦勞するため機械である。
- (7) 米だけをつくり年2回収穫している。この農民はクムヤイ（大きい組の南地区）の代表であると同時に農業協同組合の委員（行政区レベル）で、コミュニティのリーダーとしての役割を担い行政区からの情報を伝達する。この他苦情を受けてコミュニティを見て回り村長に伝える。組合の活動は国から予算の範囲で一部の補助を受けるが組合費を払う必要はない。2017年から組合では肥をつくる仕事を与え300パーツで働いてもらい、肥は1kg1パーツで売る。赤字だが国の予算で運営している。組合員数はヌーオーノイ村で60人、クドナムサイ行政区では1000人くらいいる。この組合からお金を借りることはできない。なお村には病院がないのでクドナムサイの病院に行く。
- (8) このクムヤイの代表者によると、ローンケークは若い人が悪い意味で使うがそれはよくないと思っている。労力交換として農民が米を刈るローンケーク (ravishi, traditional harvest) で米を女性、農民を男性として解釈することがあり (copulate, rape), 特に若者はこの意味で使うことが多い。このためローンケークではなく、「伝統的な稲刈り (パペーニーギョーカオ)」 (パペーニーは伝統的, ギョーカオは稲刈りの意味) と言ったほうが意味が正しく伝わることを指摘している。
- (9) 中部タイではアオレーン (ao raeng) という言葉が日本のユイと同じ意味で使われていたとするが (北原, 1987, 351頁), 今回の調査地点では確認できなかった。このアオレーンは「先に手伝いに行く」あるいは「一肌脱ぐ」という意味があるため、ローンケークのほうを手助けに対して返礼をするという互酬性を表しているように思われる。
- (10) ここではもち米 (6月~12月) が年1回収穫され、ニンニク (1月~6月), ヤーワン (甘味草) の栽培がされている。ヤーワンは3週間ごとに摘み取り、2kg1200パーツほどで売られる。このヤーワンは砂糖代わりに飲み物のガム (シロップ) として使われてきた。政府がヤーワンを植えることを奨励し、この地区では多く栽培されている。特に寺院が買い農民の収入を助けている。これは寺院がヤーワンを売ると普通より高く売れるため、農民はその収入のいくらかをお寺に寄付する。地域内でお寺を核に共助が循環していることがわかる。なおこのオムローン村はクム・オムローンとクム・フアボン (Huaibong) の2つのクムから成る。それぞれのクムに寺院が一つずつある。
- (11) この農民の家は大きく、それだけ土地も広いことがわかる。雨が降っても農作業ができ涼しい高床式の作業場でヤーワンの仕分けや竹細工をつくる。米 (7月~10月) は年1回収穫するが自給自足の食糧用である。ニンニクとヤーワンが換金作物で、ヤーワンは砂糖代わりに取扱業者を通して台湾に販売される。
- (12) このオムローン村は人口が約500人 (クム・オムローン約380~400人, クム・フアボン約100~120人) で約130から140世帯ある。村長の任期は5年だが、30%の承認で60歳まで続けられる。この村長は7年前に選ばれた。村の基幹作物のヤーワンは注文を受けて業者 (乗合バスのソントエの運転手5, 6人) に販売する。この村長は元僧侶だが、タイでは両親に育ててもらったお礼として、また亡くなった両親が天国に行けるよう僧侶になることが少なくない。
- (13) タコ行政区はMaejantai, Panaseri, Mai pattanaの3つの行政村から構成される。この男性はメアジャンタイ村 (Ban Maejantai) の代表である。この行政区は全部で222世帯

あるが、マエジャンタイ村の人口は225人で39世帯である。この世帯数から言えば、マエジャンタイ村が同時に集落単位の自然村と考えられる。すなわちここはアカ族が山間部を開拓して移住してできたところで、一つの行政村（Mooban）が一つの集落（ban）から構成されていると捉えることができる（1行政村1集落）。タコ行政区の代表はPanaser村に住み選挙で選ばれる。マエジャンタイの村長も同様に選挙で決まり任期は4年である。村長は村ができたちょうど37年前に生まれた。このアカ族の村は1300mの高地で涼しいが、訪問した3月は炭で暖をとらなければならないほど寒く霧が多かった。生活インフラでは山の水をタンクにためて使い、太陽光発電により電気を利用する。なおチェンマイから着いたバスを下車した停留所から続く道路は2年前によく舗装されたが、村内の道路は舗装されていない。

- (14) 桃や梅もつくっているが、農業指導者からコーヒーがこの土地に適していると言われた。コーヒーはアラビカで「Maejantai Coffee Arabica 100%」の商標ラベルで販売する。コーヒーは木を植えて3年後に実がなるが、10年から20年たって実が安定して採れる。毎年10月から3月に収穫する。サハゴーン（組合）が村にないため自分たちで販売している。
- (15) アカ族村長の祖父は中国の雲南省のシーサンパンナ（タイ〈ルー〉族自治州）にいた頃からケシを伝統的な換金作物として栽培してきた。
- (16) この男性はアカ族の言葉しか話せないため息子がタイ語に通訳した。中国の雲南省のシーサンパンナからタイに来た当時（28歳）はお金を使わない自給自足の生活であった。現在米作と養豚、養鶏が中心だが、当時はケシの栽培と焼き畑をして水牛（稲刈り用）と馬（乗り物用）を飼っていた。なおアカ族では正月に牛を殺して食べる習慣がある。
- (17) この女性はメーサイで生まれ、別の村に2、3年過ごして10歳のときここに来たが、小学校は貧乏で行かなかった。夫は既に亡くなり、4人いる子供（30歳、27歳、25歳、20歳）のうち仕事と勉強で外国に現在二人いる。誰かが助けてくれることはなく、自分一人で子供を育てた。今は保育園に子供を預けて仕事に行くこともできるが、畑に出るときは子供を背負い労働した。この村では子供の数は3人から4人だが、7、8人の人もいる。農民はこうしたことも話してくれた。
- (18) 現在米（6月と12月収穫）、トウモロコシ、イモ、パッションフルーツをつくっている。自分は6人子供を生んだが、今も畑に出て農作業をしている。イーサーン（東北部）では夜ホテルの明かりで収穫し田んぼで寝たこともあった。村の集会場で年1回健康診断があり、脂っこい肉は食べないで野菜をよく食べるようにしてきたが、鶏肉はときどき食べるという健康面の話までこの女性は聞かせてくれた。
- (19) メアエーブ村の村長である40代女性（タイ〈ルー〉族）によると、村の人口は3500人で世帯は約500ある。この村は5つの民族から成り、タイ〈ルー〉族40%、アカ族5%、ラフ族5%、ルア族20%、タイヤイ（シャン）族30%の構成である。農業は米やトウモロコシ、イモ、フルーツ（リュウガン、マンゴー、ランウータン）で、焼き畑はトウモロコシを1回収穫して燃やすことを繰り返す。3月から4月はトウモロコシ、イモの収穫で、イモを採ってからすぐまたイモを植える。5月にはトウモロコシを植え9月に収穫する。米は6月から7月の雨期に植えて11月から12月に収穫する。1月から2月の多雨の時期は土地をならすためやせないよう何も植えない。なおこの村長は18歳以上の選挙で6年前に選ばれたが、任期は事実上終身である。

- (20) 70代の女性は今も農業をしている。この二人は40年から50年前にこの地区に来た。日本の高齢者の介護問題について話すと、親に対するお返しとして子供が介護し自分の家で世話になることが多い。ここには80歳90歳の人もある。長寿の秘訣は自分の作った野菜を食べることである。なおこの地区での聞き取りはすべて女性であったが、中国雲南省のビルマ（ミャンマー）、ラオス国境地帯での国共（国民党と共産党）の内戦で夫を亡くした人が少なくない。
- (21) ろうそく祭りは大きな行事で、雨期には草木が生え繁り、昆虫、蛇など数多くの小動物が活動するため、それらを踏み殺さぬよう僧侶たちが遠出を避け寺院に籠もり修行に励むとき、すなわち陰暦8月の十六夜の日（新暦7月頃）に始まる。この日から出安居の日までの約3ヶ月の間、僧侶は仏教の修行に専念する。人々は大きなろうそくの山車で行列をつくり寺院に奉納する。この習慣から様々な彫刻を施した山車や踊りのパレードがろうそく祭りで行われる。タイ仏教ではパンサー（タイ語 พงษ์สาร）と呼び、安居に入ることをカオパンサー（ワン・カオパンサー、タイ語：เข้าพงษ์สาร, 入安居）と言い、安吾を終えることをオークパンサー（ワン・オークパンサー、タイ語 ออกพงษ์สาร, 出安居・明安居）と呼ぶ（タイ国政府観光庁<https://www.thailandtravel.or.jp/about/calendar/>）。またブン・バンファイは東北地方の有名な郷土イベントの一つでロケットフェスティバルである。バンファイは東北地方の言葉で「空へ打ち放す砲撃能力が充てんされた竹」を意味し、手作りバンファイは様々な得度式で行われる。毎年陰暦6月（新暦5月頃）、豊穡をもたらす豊かな雨を乞う儀式として開催され、ロケットが空高く上がれば雨に恵まれ五穀豊穡とされる（同上ホームページ）。
- (22) この女性は現在組合店舗を委託され経営する管理人で、毎日4時には市場に行き品物を仕入れている。なお祖父は理髪師である。
- (23) これは生活向上協会（パタナクナパーサマーコム）からの支給で、家単位の加入は任意で年間400バツ払う。子供が生まれたときには祝い金がもらえる。協同組合とは別の互助組織で、ヌーオーノイ村の村長によれば、クドナムサイ行政区で1610軒、ヌーオーノイ村で約100軒加入している（2017年8月聞き取り）。
- (24) この女性が東北部から来たのは今から53年前の10歳の時で、この年チェンライで結婚した。イーサーン（東北部）は暑くて作物が育たないため、主人の親戚がチェンライへの移住を勧めた。当時女性は17歳から18歳で結婚したが自分は早かった。母親は子供が5人で、自分が一番上の長女だが小学校は4年生まで通った。こうした生い立ちをこの農民は話してくれた。
- (25) 農村社会の変容はそれだけ近代化、すなわち市場経済の影響を強く受けている証左でもある。行政指導の農村開発に伴う「行政村」の現状と変容の調査では「始めに行政化ありき」の視点が強いが、この点本稿は互助慣行から捉えた「自生的な社会秩序」としてともとある「自然村」としての生活の原型に焦点を当てている。
- (26) この共有地の見解は後述する小口金融同様チェンマイ大学人文学部歴史学科アタチャック・サタヤヌラック（Attachak Sattayanurak）教授の話による（2018年3月聞き取り）。なお誰もが支え合うという精神は宗教（仏教）とは関係ないと言う。共有山などを管理させるためにその根拠（共有財産）として宗教を利用した面があるかもしれないという指摘もあった。

- (27) 水野は日本の親族の直線的な拡大としての「同族」に対して、タイ東北部では親を中心に子供（娘）夫婦が親の敷地内あるいはその隣接地に居を構え世帯家族として結合しやがて生家から分離する「屋敷地共住集団」を指摘し、その家族類型を日本と比較した（水野、1981102-128頁）。
- (28) この女性が管理している共同店舗では売値はこの担当者が決める。たとえば菓子を8パーツで仕入れると10パーツで売るが、仕入れ商品に値札がついているものはそのまま売る。掛売り（後払い）はノートにつけて後日集金する。店舗の担当者は1年で交替するが、この女性は数年来担当している。利益は貯蓄して割り戻しの原資とする。会員への割戻額は6%で、その残りが店舗担当者の人件費となる。
- (29) 子牛の誕生はオスの精液をメスに注入することで子牛をはらませる。1回700パーツかかるが、元気のいいものは高く2500パーツもする。この注入方式では自然の行為と違い、体力的に弱い牛が生まれることが少なくない。子牛はオスではなくメスが生まれると幸運であるとされる。生まれてからは母牛が子牛に乳を飲ませなくなるまで母牛を手元に置いておいてもよい。離乳後は子牛に草を食ませる。母牛を返さないと村長とクムの代表が返すように督促する。
- (30) 以下の内容は注26で示したチェンマイ大学人文学部歴史学科アタチャック・サタヤヌラック教授の話に基づく（2018年3月聞き取り）。
- (31) かつての華僑はタイ社会の中に浸透しその後裔がタイ仏教に帰依して僑生（ルーク・チーン）や華裔（ラン・チーン）として枢要な地位をタイで占めている。ここで中国人として居住国に帰化して国民となった者が華人で、外国生まれの中国人の後裔が僑生や華裔である。このため外国人としての華僑とも純粋なタイ人とも異なる華人系国民として融合し定着化した第三の民族社会がタイでは構成されているとする指摘がある（河部、1997、139-145頁：157-166頁：176-184頁）。華僑は中国人として海外に僑居（仮住まい）する意味をもつ点で、タイでは華僑という言葉は死語になりつつあるとされる。都市部では華僑がもつ個人主義が華人や僑生、華裔に浸透している。植民地時代の為政者社会（白人）、華僑社会、現地人社会という複合社会に代わり、華僑が僑生や華裔としてタイ社会に定着して新たな上階層化した二重社会が構成されている点はタイに限らず、フィリピンやインドネシアにも言える（同上、176-184頁）。
- (32) このWat Potharamに住む90代の僧侶の話では、終戦のときは22歳で自分は60歳のとき僧侶になったがお寺があまりにも平和で外が平和でないことがその理由だった（2017年8月聞き取り）。「開発僧」は政治や経済について学習している僧侶で、自分たちは農業活動はしない。この僧侶は英語の他にラオス語も話せる。若い頃コーチとしてボクシングに関わりアメリカに行ったことがある。ボクシングを見ていたとき日本の機銃掃射で逃げたこと、ウドンターニー県にいたときには日本人と旅行した経験、日本人は性格がいいということも話してくれた。
- (33) 筆者と通訳の学生も昼食をご馳走になり、少しこの選別作業に加わった。これは訪問した日が日曜日で翌日の月曜日にはニンクを出荷するための作業であった。
- (34) 現在国から年金として毎月60代に600パーツ、70代に700パーツ、80代に800パーツ、90代以上に1000パーツもらえるが、この負担が今後大きくなることもこの男性は指摘している（2017年8月聞き取り）。

- (35) この点筆者が泊まったバンガローでも電気はなく、発電機を使い明かりを確保する状態だった。
- (36) これは特に上座部仏教が説く各人の自由意志に基づく喜捨の精神からきているとする考えがある（佐藤，2009，86：92頁）。この点タイ人の国民性として「好きなように任せてしまう」というレオテーの精神も多く指摘されてきた。
- (37) 河部によれば，こうした仏教とは異なる精霊信仰に基づく庶民レベルの儀礼重視の点に目を向けずに仏教やヒンズー教，イスラム教という外来宗教に捉われると，庶民レベルの生活の実像がつかめないとする（河部，1997）。確かに外来宗教にこだわると土着宗教を奉じてきた東南アジアの全体像を見失いかねないだろう。ヒトに対するモノへの信仰は農作物の祈願で大地の女神や稲魂への儀礼（落穂拾い）として表れ，これは日本の農村でも自然に恵みに対する感謝の気持ちを示す各種の祭りに表れている。しかし日本と異なるのはタイでは宗教それ自体が生活の隅々まで浸透している点で，宗教的な生活からその国民性を読み取る素材は日本以上に多いと思われる。
- (38) 「ねずみの肉を象のためにとるな」というタイのことわざは貧しい人から金銭をとり富める人に与えてはならないことを意味する（河部，1997，34頁）。これは逆に富める者は貧しい人に金銭を分かち与えるべきであることを示す。こうした相互扶助の精神はもともと生活していくうえで村落に自生していたと思われる。なおこの貧富による階層意識の差は1455年から1932年まで続いた王から下賜された水田の面積によって位階勲等を定めた「サクディナー制」（権威田制）が知られている。土地が王の所有物でそれを下賜することで国民を守るという「国王は国民の父」という家父長的温情主義がそこには浸透している。

〈参考文献〉

- Embree, J.F. 1950. Thailand: A Loosely Structured Social System, *American Anthropologist*, 52 (2): 181-193.
- 東恩納寛惇, 1941. 『泰ビルマ印度』講談社。
- Kaufman, H. 1960. *Banguad-A Community Study in Thailand*. New York: Augustin Incorporated Publisher.
- 河部利夫, 1997. 『タイのこころ』勁草書房。
- 北野淳編, 1987. 『タイ農村の構造と変動』勁草書房。
- 北野淳, 1990a. 『タイ農村社会論』勁草書房。
- 北野淳, 1990b. 「開拓社会の成立」『講座東南アジア学』（坪内良博編，東南アジアの社会，第3巻）弘文社，71-99頁。
- 水野浩一, 1981. 『タイ農村の社会組織』創文社。
- 恩田守雄, 2001. 『開発社会学』ミネルヴァ書房。
- 恩田守雄, 2006. 『互助社会論』世界思想社。
- Onda, Morio. 2013. Mutual help networks and social transformation in Japan. *American Journal of Economics and Sociology*, 71 (3), 531-564.
- 恩田守雄, 2016 「フィリピンの互助慣行—日本との民俗社会学的比較—」『社会学部論叢』，第27巻第1号1-32頁。

- 恩田守雄, 2017a 「東アジアにおける互助慣行としての小口金融」『社会学部論叢』, 第27巻第2号1-27頁。
- 恩田守雄, 2017b 「インドネシアの互助慣行—日本との民俗社会学的比較—」『社会学部論叢』, 第28巻第1号1-39頁。
- 恩田守雄, 2018. Micro Finance in Traditional Mutual Help Networks in East Asia: A Comparison of Rotating Savings and Credit Associations in Japan, South Korea, China, and Taiwan. 『社会学部論叢』, 第28巻第2号1-25頁。
- Potter, J.M. 1976. *Thai Peasant Social Structure*. Chicago: Chicago University Press.
- 佐藤康行, 2009 『タイ農村の村落形成と生活協同』 めこん。